

## 第2回 日田もりビジョン推進検討委員会

日 時 令和5年11月6日（月）午後2時

場 所 日田市役所 7階中会議室

### 1. 開 会

### 2. 大呂委員長あいさつ

### 3. 議 題

#### (1)日田もりビジョンの見直しの骨子（案）について

- ・第1回会議の発言に基づいた整理について 資料1
  - ・現状と課題の文言整理について（現行ビジョンP1～P31） 資料2
  - ・施策体系の変更（案）について 資料3
- （資料1～3、説明略）

#### 【質疑・応答】

#### 大呂委員長

前回の意見を踏まえて対応いただいている。気がついた点があれば意見いただきたい。

#### 委員

日田家具の動向として、一般向け B to C（企業が一般消費者を対象に行うビジネス形態）の需要は落ちている。そのため、企業向け B to B（ホテルや商業施設、公共施設を対象に行うビジネス形態）の販売強化に取り組んでいる。地域材の活用・販路開拓として学校家具の開発に取り組んでいる。現在、学童机・椅子のデザイン、生産を行っており、本格的に販売を開始し、今年度は順次市内の小中学校に納入し 1,000 台を予定している。今後 5 年かけて 4,600 台納品予定である。特徴としては、オリジナルデザインで天板、座面、背板は日田杉、その他はスチールを使っている。ハイブリットな学童机で、今後は全国展開も考えている。産学官交流事業として、大分県芸術短期大学と産業科学技術センターと地域材の利活用に向けた連携を行っている。日田家具工業会のメンバーが芸短大の講師を務めたり、学生が日田に来て授業を受けたりしている。また、デザイン開発においては、優秀な作品であれば、家具メーカーでプロトタイプを試作している。大川市も産学官連携で、早生樹のセンダンを使った商品開発を九産大と行っている。林業資源活用による地域活性化の取組としては、産業観光プログラムで、家具の工場見学をツアーに組み込んでもらっている。また、コロナ禍では活動が止まっていたが、ビックサイトな

どの展示会で、地域材を使った家具の出展も行う予定である。なお、地域材の活用においては、クオリティを上げる必要がある。具体的には、材の含水率を 13%まで下げる必要があるが、これは、一旦 7%まで下げて、13%まで戻す作業をしている。スギは歩留まりが悪いので家具に使うのは難しい。米材、欧州材に比べて値段が高くなる可能性がある。そのため、家具にスギ材を使う場合は、外材と差別化できるよう、消費者に対してスギを使う価値やスギの特徴について説明する必要がある。

## 委員

前回出ていた女性の活躍について、資料 1 の No. 7 で対応してもらっているので良かった。建設業界においては、環境が整っていないので女性は選択肢にすら入らないということもある。安全で働きやすい環境が整い、それをアピールできるのは良いと思う。資料にある住宅着工戸数は平成 30 年～令和 4 年のデータが新たに追加されている。これを見ると、ウッドショックの際は異常なほど着工されたので、現在は減ったというよりも元に戻った感じだ。現場感覚では、2025 年の建築基準法の法改正を前に、駆け込み需要の発生が予測される。

## 委員

新設住宅着工戸数について、ウッドショックの際に微減でその他の時期は上昇傾向にあるのが全国の傾向である。資料 2 の 14 ページの下の記事で、「令和 2 年に我が国では新設住宅着工戸数が減少したことなどから～」とあるが、令和 2 年だけの減少なので、この要約内容を確認していただきたい。資料 3 (2) ③の特用林産物の振興「しいたけの生産拡大、新たな林産物の生産拡大」について、日田もりビジョンに対応する 55 ページの記事のようにわずか 5 行でまとめて良いものなのか。しいたけの需要減少、価格下落、生産者の減少・高齢化などの問題にどのように対応していくのか。日田市の特産として生産を促していきたいのかが見えていない。ビジョンが、しいたけ栽培に参入してみたいという人が 1 人でも多く現れるためのツールになってほしい。現在、バイオマス発電が全国で乱立しており、成熟期に移っている段階で、後発組と先行組とで材料の奪い合いが全国的に激しくなっている。材の上昇が経営を圧迫し、経営譲渡の事例も見られるようになった。日田市は、原木市場も多くあり、A・B 材を使う製材所もたくさんある。そのおかげで未利用材としての CD 材は、発電所で必要な量が集まっている状況だ。しかしながら、日田近辺では熊本県菊池、福岡県夜須など半径 50km 圏内でバイオマス発電が稼働しており、競合が激しくなっている。

## 大呂委員長

バイオマス発電所の話は重要と思うがビジョンには盛り込まれるのか。

## 事務局

バイオマス関連については、現行ビジョンの 54 ページに記載しているが、委員の意見を踏まえて検討したい。しいたけについては、4～5 年からの変更点として、大分県と一緒に「うまみ

だけ」という品種を推進しているので、その点をビジョンに記載したい。住宅着工戸数については、国や県の計画を踏まえて整理する。

## 委員

担い手の育成・確保の項目で、機械化が進まない造林作業者の育成を進めるとの記載があるが、機械化が進まない植栽、下刈で人手が不足しているのは事実だが、機械化が進んでいる素材生産でも不足している。林業作業者あるいは林業労働者の育成としてもらったほうが良いのではないか。人材については、なんとか確保し育成しても定着しないことが課題だ。「定着」についての取組は確保・育成に含まれるのか。定着をさせるための課題解決をどのように図るのかも考えていただきたい。

## 事務局

人材の確保については、ここ2～3年、主伐・再造林が増加するなかで大きな課題となっている。新しくひた森の担い手づくり協議会ができ、原木市場を中心に取り組んでもらっている。また、素材生産者は、大分県の認定事業体として支援に取り組んでいるので引き続き取り組んでいきたい。定着については、退職金や社会保障の充実などを、どこまでビジョンに盛り込めるかは検討が必要だが、一緒に考えていきたい。

## 委員

産業としての日田の林業において、森を活かす部分については大規模林業経営者などが伝統的にしっかりしている。製材所についても、日田全体を1つの製材所と捉えている。家具業界も先ほどの話の通り様々なことに取り組んでいる。一番大切なのは、「森を育てる」の部分だと思う。資料2の3ページの冒頭に「自然の地形になじまない植林～」の部分は、良い文章だと思う。戦後の拡大造林でスギをどこにでも植えてしまって、今伐期を迎えている。その森林を今後どうするかを考える際に、日田の森林所有者は5ha未満が9割を占める。市外の所有者が4割と記載があった。そのような状況で森林組合の組合員が8割といわれているが、資料4の意識調査では、林業に対して関心が薄れている人がたくさんいる。そのような山をどう守っていくかが一番大切だ。ビジョンはそこに主眼を置いて欲しい。このままでは、50～100年後の日田の林業は非常に厳しい状況になると思うので、現段階で対策をしっかり固めてほしい。

## 事務局

基幹産業として、森林・林業・木材産業は、経済的にも支えていかなければならない。手入れ不足の森林については、国の森林管理制度や譲与税を活用しながら、公益的機能の維持・向上のためにしっかりと整備していかなければいけないという意見と認識した。意見を踏まえて事務局で整理したい。

## 委員

公益的機能はあるが、実際に整備をしたり、伐採する際は、持ち主の許可なくはできない。その際にどうすれば良いのか。先端まで植えられている状態で、持ち主がわからない、あるいは持ち主がいても境界線がわからないというような山は、どう伐採すれば良いのか、広葉樹を植えたくても植えられない。そこをどう対処していくかが課題と思う。

#### 大呂委員長

委員の意見は重要な論点なので、ビジョンにどこまで盛り込むことができるかという点はあるが、考えるべき課題だ。

#### 委員

現在、市場における大きな課題として大径材が増加する一方で、日田の市場では価格が安いことが挙げられる。現在、原木市場で最も高いのは14～16cmで、2万円をこえている。一方、大径材の30cm上は、直材でも1万4千円程度で、40cm上となるとさらに安い。大径材は材が悪いわけではない。小国材で4m、径級60cmで1万2千円程度だ。径級が大きくなると応札が1～2人しかいない。しかし、熊本県の市場では、大径材が3～4万円で売れている。そのため、小国、南小国の伐採現場では、土場で径級を分け、大径材は熊本に、小さい材は日田に持っている。熊本県で価格が高いことを考えると、大分県全体で大径材の製品化を考えないと、日田には小さい丸太しか集まらないようになる。日田市内での利用促進など、どうにかならないのか。

#### 事務局

資料2の9ページに新たに記載しているが、林業の成長産業化に平成29年から5年間取り組んできた。写真にもあるように大径材対応した整備に取り組んできた。製品化についても、市だけでは難しいので県と共同で研究している。

#### 委員

県でも大径材を課題にしている。搬出される森林資源の20～25%が大径材で、毎年1%程度増えている。全体量は変わらないが割合が増えている。この状態が続けば3～4割を占める可能性はある。大径材が処理できる製材所の整備が必要で、製材所で加工機能を高めてもらうことを支援策の1つとして進めている。県内での需要拡大は難しいが、九州全体を流通先として検討することも必要だ。しかし、企業それぞれの付き合いや関係性があるので、県としてできるのは入口までになる。整備が進んでないところもあり、資源はあるが、出口がないので対策が必要だ。皆さんと協力して進めていきたい。

#### 委員

人材育成については、林業アカデミーがあるので、そこを修了して各団体に入ってもらえれば良いと思う。また、資料で説明のあった日田林工の専攻科の設置も実現できると良いと思う。

山側の担い手不足も課題だが、森林組合の内部の人材不足も大きな課題になっている。組合内で、現場を指導する側の人材を育てる必要がある。後継者がいなくなっている。林業専攻科や地元出身者に限らず、山仕事以外の人材で経営を担う人材が確保できれば良い。林工にも募集の相談をしているが、森林組合には入ってくれない。

## 委員

ビジョンの案に対して意見はないが、先週の事案をお伝えしたい。地元の自治会に携わっている人から、45名の共有林の相談があった。45名中、半数しか地元にいないが、伐採が可能かどうかという内容だった。伐採して収益があるかの見積はできるが、伐採した後の所有をどうするか、いない人の許可をどうとるかなどについては、組合としては踏み込めないし、法律の壁もある。もう1つは、先日、生産森林組合共有林の相談を受け付けるというチラシが入っていた。会社はよくわからないが、法律にも詳しい人が関与しながら、そこに目をつけながらやっていくのは怖いと思った。組合として相談に乗ってあげられない歯がゆさもある。市内には共有林、生産森林組合の森林もたくさんある。行政としてできる部分是对応を練ってほしい。行政が相談に応じることはできるのではないかと。ビジョンへの反映はわからないが、検討いただきたい。

## 大呂委員長

行政としてどの程度対応できるかは検討してもらいたい。

## 事務局

共有林の所有方法としては地縁団体を組織するなどがある。また、チラシの組織については情報を収集したい。県と協力しながら検討したい。

## 委員

部落の共有であれば地縁団体に持っていくこともできる。他の地域の話だが、地縁団体の相談があった際に、行政では相談でさえも難しい雰囲気醸し出されたということだ。相談を含めて行政が対応するのが良いと思う。

## 委員

委員の意見に加えて深刻なことがある。コロナのこの4年間で大きく状況が変化した。家じまい、墓じまい、法事をしないという親戚じまいを行う人が増えている。このような時に山林の処分は先に行われる。共有林の処分については行政で対応できない。日田市には生産森林組合が70程あるのでそこに受け取ってもらうのが良い。地の利がある。私共の生産森林組合でも受け取った。その後で森林組合が管理するなどしか策がない。法務省登記所備付地図をウェブ上で閲覧できる地図ビューアが提供されている。このビューアでは、所有者以外の詳細な情報が全て記載されている。この情報と日田がレーザー計測で作成した赤色立体地図を併せて活用す

ると森林管理が楽になるのではないか。委員が述べた、植え過ぎた山の尾根部分を誰が管理するのかという問いには、地元に残る人がどうにかするしかないと思っている。それを我々業界や行政が手助けするしかないと思っている。DX の活用で森林管理を行うのに加え、県に習って許認可の申請もデジタルで申請・許可ができるようなスマート化を目指して欲しい。

#### **事務局**

共有地に関しては、所有権の移転はハードルが高い。伐採、造林をする際に、不明者が1名いるという場合には、共有者不確知森林制度があると聞いているので、何らかの取っ掛かりはあると思う。国も所有者不明の土地をどうするかについては、法改正などで動いている。状況をみながら行政として課題ととらえ検討する。伐採・造林を最低の経費で実施し、収益は供託にするなどの制度もあると聞いている。情報収集して共有したい。

#### **委員**

その通り理解している。施業については理解しても、その後の管理や所有をどうするのかに引っかかっているというのが相談者の実情だ。難しいのは十分承知しているので、話を聞いてくれる相談先があるのが良いと思う。

#### **大呂委員長**

一連の議論は不在地主を前提とした、持続的な管理の在り方が具体的に考えることを問われている。ビジョンに盛り込めることは盛り込み、盛り込めない部分は施策としてどうするか検討してほしい。

#### **(2)アンケート結果報告について**

##### **・クロス集計について 資料4**

(資料4、説明略)

#### **大呂委員長**

日田市外の所有者も対象にしたアンケートであれば、不在所有者の動向について現状認識についてのデータとなると思う。ビジョンにも反映できる箇所は反映してほしい。

#### **4. 今後のスケジュールについて**

#### **事務局**

9月10月でヒアリングを行いましたので、次回はヒアリング結果を踏まえたビジョンの素案について議論してもらおう。次回の第3回目の会議は12月20日を予定している。パブリックコ

メントは1月を予定している。第4回目の会議は、2月を予定している。

## 5. その他

### 委員

日田高校のスーパーサイエンススクールの委員をしている。高校生は林業に対して面白い発想を持っている。林業の担い手を増やしたいという生徒と話をする機会があったので、自分自身は林業に就かないのかと聞いたところ、就かないということだった。良くしたいと思っているが4Kの職場という認識だ。そこで、おしゃれな恰好をして月収18万円の職場と月収50万円の林業職ならどちらが良いか尋ねると、間髪いれずに林業と答えた。要するにもうかる林業にすれば良いと思う。表現の方法は検討が必要だが、日田のビジョンには、収益性の高いというニュアンスを入れてほしい。

### 委員

先ほど委員の話にもあったが、地産地消でとまっている。製品を福岡に持っていけば利益が上がる。福岡県の大工は、大分県と異なり苦勞して弟子上がりして大工になるのではなく、学校に1年間通った人があつまって工務店のようなことをしている。電動カンナしか使えないような人が仕事している。福岡は消費地なのではないが、工務店の技術を移出する方法もある。スギの加工は難しいという話だったが、バイオリンを作った人もいるくらいなので、もうかる業界をめざすことも必要。今回は見直しだが、次回の新しい林業ビジョンではそのような内容を大いに記載しても良いのではないか。

### 事務局

林工生の保護者はもうからないと林業の仕事に就いてくれないといっている。林野庁が最近言っている「新しい林業」は、「もうかる林業」を指している。新しく収益性のあるという形で検討できればと思う。

## 6. 閉会

### 事務局

これもちまして、本日の委員会を終了いたします。ありがとうございました。

以上